

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

### 『金融危機管理の成功と失敗』

徳丸浩 著 | 日本評論社 2018、227pp.

本書は、日本銀行出身の著者が、かつて世界各国で生じた金融危機に対し当局がどのように対応したのか、1990年代に発生したスウェーデン、インドネシア、日本についてのケーススタディを行うとともに、その後の金融規制改革を追跡することによって、ブルーデンス政策上の含意を検討しようとしたものである。

90年代の金融危機とその対応については既に様々な論者が様々な観点から議論を展開している中で、本書の結論としては、例えば、金融危機管理において、市場との意思疎通を通じた政策問題的確な認定、これに基づく政策アジェンダの合理的設定、政策目的・政策環境と政策手段との整合性などが重要であるなど、堅実で重要な論点が指摘されており、特に金融システムに内在するシステミックリスクを的確に分析できるか否かという点が強調されている。あえて欲を言うなら、例えば、折角3か国のケーススタディを行うのであれば、金融危機発生時期における発生国の為替レート変動などの（実務家はよく言及するものの研究者はそれほど重視しない傾向にある）外的環境が各国の金融危機及びその対応にどのような影響を与えたのかといった点についても、実務家出身者ならではの視点から言及があればより深みのある議論になったと思われる。

いずれにせよ、日本の金融危機時に日銀で危機対応に当たった経験を踏まえた本書における研究成果は、このテーマに関する既存の論考に一層の厚みを加えることになるのではないかと。

評／『彦根論叢』編集委員／片山雅志

### 『金融商品取引法への誘い』

川口恭弘 著 | 有斐閣 2018、208pp.

本書は、金融商品取引法の簡潔な入門書、正確には著者の言う「読者を金融商品取引法の世界に『誘う』（いざなう）もの」である。そのため、法の内容を網羅的に解説するのではなく、不公正取引、企業買収、開示（ディスクロージャー）、金融商品取引業者という四点に関する規制のポイントに絞って、図の多用により分かりやすく説明している。

本書の最大の特徴は「不公正取引」から書き起こされている点にある。評者が学生に金商法を講じる際にも、不公正取引、特にインサイダー取引などの解説には（マスコミ等で大きく報じられる機会が多い話題であるためか）学生が興味を示すことが多い。一方、金商法は総則（目的、定義）、開示、業者等、取引規制、課徴金、雑則、罰則、犯則調査と取引の流れの順に構成され、数多の金商法解説書でも概ねこの順を踏襲している。この場合、学習開始直後に大量の難解な定義規定に直面するほか、何重にも入れ子になった括弧の多用、政令や多数の内閣府令との関係などの技術的障壁も相まって、初学者にとっては形式的・内容的に読みにくい各条文を読む必要性が理解できないまま挫折に至るパターンが多いと思われる。

入門書ゆえに不公正取引のような関心の高い事項を最初に説明して金商法の意味を理解させることがその後の学習意欲の維持に有益であるという著者の意図、またそれに伴う斬新な試みが多くの読者に受け入れられ、本書を経て金商法を本格的に学ぶ方が増えることを期待したい。

評／『彦根論叢』編集委員／片山雅志

